九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヒューム政治思想における陶冶について

鎌田, 厚志
九州大学大学院法学研究院 : 協力研究員

https://doi.org/10.15017/2231005

出版情報：法政研究. 85 (3/4), pp.375-399, 2019-03-08. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

ヒューム政治思想における陶冶について

鎌田厚志

はじめに
第一節　「人間の科学」と「人文主義」
第二節　ヒュームにおける「自由学芸」と「陶冶」
第三節　勤労・知識・シヴィリティ――陶冶に基づく政治社会
おわりに

はじめに

本稿の目的は、ヒューム（David Hume, 1711-1776）の政治思想における人間の資質の「陶冶」（cultivation）という要素に着目し、その重要性を明らかにすることである。従来、ヒューム政治思想における陶冶の要素は等閑視されてきたように思われる。[1]

ヒューム政治思想における陶冶の要素を明らかにするために、本稿では、自由学芸、雄弁、レトリック、歴史、シヴィリティといった初期近代にける「人文主義」と密接な関連を有する語彙に注目する。[2] この観点からヒュームの著作を読み解くことを通じて、ヒューム政治思想では、初期近代の人文主義の語彙と密接に関連した要素に基づいて、社会の構成員の資質を陶冶することが強く要請されていたことを明らかにしたい。

ヒュームが生きた一八世紀という時代は、近代と初期近代の狭間だった。ヒュームは精緻な経験論哲学に基づく「人間の科学」によって諸学を包摂する構想を示した点で、まさに科学を重視する近代啓蒙主義の申し子だった。と同時に、初期近代において再生した人文主義において用いられていた語彙も、本稿で見るように数多く用いている。

しかし、従来のヒューム政治思想における先行研究では、第一節で見るように、前者の近代の要素が主に照射されており、後者は等閑視される傾向にあった。だが、本稿の第二節・第三節で見るように、ヒュームの著作には、近代以後の政治思想とは異なる、古典古代から連綿と続き初期近代に再生した人文主義と強い関連を有する語彙が数多く存在している。しかも、それらの人文主義的要素は、ヒューム政治思想において重要な位置を占めていた。ヒュームが構想する近代的な文明社会は、人文主義的要素に基づく人間の資質の陶冶を前提にしていたのである。

このことを検証するために、本稿では主にヒュームの『道徳・政治・文学論集』所収のエッセイを中心に分析したい。ヒューム政治思想においては、人間の資質の陶冶を通じて、政治的な対立者同士の共存の実現が目指されていたこと、

さらにはそのような共存の中にこそ政治社会における「自由」の完成があるとされていたことを明らかにすることが筆者のヒューム政治思想研究の目的であるが、そのための前提として、本稿では「陶冶」の要素を分析しその重要性を明らかにしたい。

（本稿では、『人間本性論』は*A Treatise of Human Nature*, ed. by Selby-Bigge, Second Edition, Revised by Nidditch, Oxford University Press, 1978 を使用し、文中「T」と省略して頁数を示した。また、ヒュームのエッセイについては、*Essays, Moral Political and Literary*, ed. by Eugene F. Miller, Revised Edition, Liberty Classics, 1985 をテキストとして使用し、文中では「E」と省略して表示し頁数を示した。『イングランド史』は*The History of England*, Liberty Classics, 1983 をテキストとして使用し、文中「H」と表示し巻数と章数およびページ数を示した。なお、エッセイについては、田中敏弘訳『道徳・政治・文学論集』（名古屋大学出版会、二〇一一年）を参考にしているが、訳文は筆者による。）

第一節　「人間の科学」と「人文主義」

本節では先行研究を概観し、ヒューム政治思想研究において人間の資質の陶冶の要素が必ずしも重視されてこなかったことを明らかにしたい。そして、その理由が「人間の科学」、文明社会、機構論といった、それ自体としては重要なテーマに関する研究が主流を占めてきたことにあったことを確認し、その一方で、近年はヒュームのレトリックに着目する研究も現れていることを見てみたい。

かつて二〇世紀前半まで、ヒュームは、哲学を捨てて名声欲から歴史学へと移った人物であり、かつその歴史学はトーリーの立場に立つものと長らくみなされていた。また、レズリー・スティーブンやラスキらによって、哲学・エッ

セイ・歴史など多分野にわたるヒュームの著作には意味ある一貫性はないとされてもいた。[3]

しかし、こうしたヒューム解釈は、二〇世紀半ばから大きく変化した。モスナーは、ヒュームの歴史学への関心が『人間本性論』執筆の時期にさかのぼることを指摘し、ヒュームにおいてはもともと哲学と歴史が密接な関わりを持って考察されていると解釈した。[4] さらに、ダンカン・フォーブズは、ヒュームの哲学と政治学・歴史学との関連性を指摘し、ヒュームは通俗的ウィッグとは異なる「懐疑的ウィッグ」だったとし、名誉革命体制を中庸の立場から擁護した政治思想だったと解釈した。[5] モスナーとフォーブズ以降、ヒューム研究は哲学・政治学・歴史学の関連を強く意識するものとなり、近年では、ハーディンやサブルらが「コンヴェンション」概念を中心にヒュームの哲学・政治学・歴史学を把握する研究を行っている。[6]

日本においては、舟橋喜恵がヒュームの思想を『人間本性論』において展開された「人間の科学」という観点から一貫して解釈しようとした。[7] また、坂本達哉は「文明社会」の分析という観点からヒューム思想を解釈している。[8] 犬塚元は、ヒューム政治思想を機構論の観点から解釈し、政治学と歴史学を一貫して把握している。[9] 壽里竜は、啓蒙主義の思想的潮流の中でヒュームを考察し、その哲学と政治学を一貫して把握する「懐疑的啓蒙」という解釈枠組みを提示した。[10] その他にも多くの研究がそれぞれの分野でなされている。[11]

これらの優れた研究が示しているように、ヒュームの哲学・政治学・歴史学の多岐にわたる諸著作を、かつてのように関連性のないものとみなす見解は、今日においてはありえないものとなっている。ヒュームの哲学・政治学・歴史学を通底する要素について、さまざまな観点から精緻な研究が積み重ねられてきたのである。

しかし、これらの研究においては、ヒュームは主に近代科学・近代啓蒙主義の流れの中で解釈されてきた。あるいは、たとえば犬塚元のように、ヒュームの政治思想を政治学の伝統の中でとらえていたとしても、機構論の観点から論じてきた。[12] それらの研究はヒューム思想の解明として極めて有意義なものであるものの、ヒュームにおける人間の資質の陶

冶の議論についてはほとんど触れてこなかったように思われる。

近代科学や啓蒙主義や機構論の観点からのヒューム解釈は、それ自体は極めて正当なものであり、ヒューム自身のテキストに基づくものであり、筆者も異論はない。しかし、その結果、ヒュームにおける自由学芸の教養等による人間の資質の陶冶という要素が見落とされてきたのではないだろうか。

たとえば、モスナーはヒュームの『人間本性論』を、ニュートンの科学的方法を哲学・政治学・歴史学等の学問に適用する試みだったと指摘している。[13] たしかに、『人間本性論』には「実験的論究方法を精神上の主題に導入するひとつの企て」と記され、序文では自然科学と人文科学との関係について論じている。[14] この『人間本性論』序文における「人間の科学」の構想は、ヒュームの多岐にわたる諸著作を貫く体系性を説明する上で、一つの根拠となる。たとえば舟橋喜恵は、ヒューム政治思想を人間本性の画一性・斉一性に基づいて社会の必然性を科学的に把握する「人間の科学」として解釈している。[15]

しかしながら、ヒュームが生きた一八世紀は、近代的な科学や啓蒙主義が勃興する時代であったと同時に、未だに古典古代からの「人文主義」が根強く残っていた時代でもあった。たとえば木村俊道は、一九世紀以降のデモクラシーの時代とは異なり、一八世紀までは古代ギリシャ・ローマ以来のレトリックや思慮が文明の作法と不可分とされていたと指摘している。[16]

一貫した「人間の科学」の思想家としてヒュームをとらえる研究とは異なる問題関心から、ヒュームを「文人」（*a man of letters*）として解釈しなおしたものとして、ハリスの研究がある。[17] ハリスは、整然とした体系を最初から一貫してヒュームが構想していたとは解釈しない。『人間本性論』を執筆した二十六歳の時にすでに完成した人物とみなすのではなくて、人生を通してその思想を変化成長させていった人物として解釈する。ヒュームの諸著作は、叙述の仕方にもかなりの変化があり、必ずしも『人間本性論』執筆の最初期から一貫した体系を構想し、その構想計画に沿って後

年の政治学・歴史学の著作を執筆したわけではなく、ヒュームの知的活動を通底しているのは「文人」としての気質や関心だったとハリスは述べている。[18]

さらに、ハンヴェルトは、レトリックという観点からヒュームを読み解くという、極めて注目に値する解釈を打ち出している。[19] ハンヴェルトによれば、ヒュームは、近代に適合したレトリックを構想し、レトリックの観点から政治社会を活性化させ運営することを考えた。ヒュームは一貫して党派と狂信を批判したが、それはその二つが会話を断ち切るからであるという。さらに、ハンヴェルトは、ヒュームの諸著作に通底するレトリックについての考えを浮かび上がらせ、ヒュームはレトリックを「高次のレトリック」（high rhetoric）と「低次のレトリック」（low rhetoric）に分けていたとする。つまり、後者が人間を操作する危険性を認めつつも、正確で公正な礼節にかなったレトリック（accurate, just, polite rhetoric）である前者を肯定的に評価しており、近代の礼節を重視する感覚に合致した形に古代のレトリックを変化させ、時代に適合したレトリックを構想していたとする。[20] つまり、あまりにも過度で大げさな古代のレトリックを一八世紀のジェントルマン文化に適合させ、政治的な対話が可能な政治社会を目指したというのである。[21]

ハリスやハンヴェルトの研究は、ヒュームを近代的な「人間の科学」の整然とした体系を持った思想家としてではなく、文人として、あるいはレトリックに強い関心を持った思想家として描いている。筆者は、これらの研究に大きな示唆を得ながらも、彼らが特に論じていない陶冶について考察したい。ハンヴェルトは、適切なレトリックを用いたコミュニケーションによって人間の判断力が向上することをヒュームが構想していた点は指摘しているが、個々人が自由学芸の教養を積んで自らを陶冶することについては特に触れてはいない。しかし、レトリックを含めた人文主義的な教養、つまり自由学芸による人間性の陶冶が、ヒューム政治思想において重要な位置を占めていたことを次節では示したい。

第二節　ヒュームにおける「自由学芸」と「陶冶」

ヒュームが一七四一年に出版した『道徳・政治・文学論集』は、多岐にわたる主題を扱ったエッセイ集である。これまで、さまざまな観点から研究がなされ、ヒュームの哲学書『人間本性論』や歴史書『イングランド史』との関連についても、前節で述べたように数多くの優れた研究がなされてきた。本節では、特に人文主義的語彙との関連を意識して『道徳・政治・文学論集』を読み解くことで、人間の資質の「陶冶」(cultivation)がヒュームにおいて重視されていたことを明らかにしたい。さらに、ヒュームが陶冶を「自由学芸」(liberal arts) との関連で考察していたことを確認したい。

そのために、まず、エッセイ「趣味および情念の繊細さについて」を見てみたい。同エッセイは、『道徳・政治・文学論集』の冒頭を飾るエッセイであり、「情念の繊細さ」(*delicacy* of *passion*) と「趣味の繊細さ」(*delicacy* of *taste*) について考察したものである。半澤孝麿は、日本において同エッセイが長く翻訳されなかったことを指摘し、そのためにヒュームの理解が偏ったものになったと指摘しているが、筆者もそのように考える。[22]

『道徳・政治・文学論集』は多数のエッセイを収めた著作であるが、全く無関係な断片の寄せ集めではなく一定の意図を持ったまとまりと想定した場合、その冒頭に置かれている同エッセイは、いわば『道徳・政治・文学論集』の序章の位置を占めており、全体を貫く主題が含まれていると考えられる。

同エッセイでは、まず、人生の出来事に対して敏感な感覚を持つことを「情念の繊細さ」と呼んでいる。ヒュームによれば、敏感な感覚を持つ人は、人生の不幸に衝撃を受けやすく、人生の喜びよりも悲しみが多いことを考えると、「思慮と慎重さ」(prudence and discretion) を越えて誤った方向に向かいやすい。[23] それに対し、「趣味の繊細さ」とは、美しさに対して繊細な感覚を持ち、詩や絵画に大きな味わいや満足を感じとるものである。「情念の繊細さ」と「趣味の繊細さ」は、繊細さという点では類似しているものの、「情念の繊細さ」が持つ問題は克服されるべきものであるのに

対し、「趣味の繊細さ」は「望ましく、陶冶されるべきもの」（to be desired and cultivated）である。趣味の繊細さは、自分がコントロールできる幸せに寄与するからである。情念の繊細さに伴う欠点を是正するには、「より高度に、より洗練された趣味を陶冶すること」（the cultivating of that higher and more refined taste）ほどふさわしいものはない。つまり、ヒュームによれば、趣味の繊細さを養うことが情念の繊細さの抱える問題を解くというのである。さらにヒュームによれば、「科学と自由学芸」（the sciences and liberal arts）に関する洗練された趣味を養うためには、多くの見解を理解し、人間本性に関する知識を必要とするため、「自由学芸において嗜好を陶冶する」（cultivating a relish in the liberal arts）ことで、私たちの判断力が鍛えられるべきである。[24] そして、「洗練された技芸に対する陶冶された趣味」（a cultivated taste for the polite arts）が「すべての優しく心地良い情念に対する私たちの敏感さを改善する」と指摘する。詩や雄弁や音楽や絵画などの、美しいものについての学問ほど私たちの気質を改善するものはない。また、趣味の繊細さは少数の人々との友情を生み出すというのである。[25]

この短いエッセイには「リベラル・アーツ」、「思慮」、さらには「雄弁」といった、人文主義的語彙がふんだんに盛り込まれている。さらに、それらによる「陶冶」が重視されている。つまり、ヒュームは、人文主義的な教養によって、「趣味の繊細さ」を陶冶し、そのことによって情念の繊細さを克服すること、つまり情念の激しさを陶冶し洗練されたものとすることを構想していた。

注目すべきは、「趣味の繊細さ」が美的な趣味に限定されず、「科学と自由学芸」にも関わるとされていたことである。そのことを端的に示している一文を、いささか長いが引用したい。

私たちの感覚を強く打つ、明白な美に対する嗜好の多少は、その人が気質として持つ敏感な感覚の多少に全く依存する。しかし、科学と自由学芸に関しては、洗練された趣味は、ある程度同じか、もしくはより一層、敏感な感覚に依

存しており、それら〔科学と自由学芸に関する洗練された趣味と敏感な感覚のこと。―筆者補足〕は切り離すことができない。天才の作品を正しく理解するためには、多くのものの見方が考慮され、多くの事情が比較されるべきだし、人間本性の知識などが必要とされる。そのような健全な判断力を持っていない人物は、決してそのような行いにおいてふさわしい批評家になることはない。そして、このことが、自由学芸において嗜好を陶冶する（cultivating a relish in the liberal arts）ことの新しい理由である。私たちの判断力は鍛錬によって強化される。私たちは人生についてのより正しい概念を形成する。他の人々を喜ばせたり悩ませたりする多くの事柄は、私たちにとっては注意を払うに値しないつまらないものと感じられるようになるだろう。そして、私たちは、不都合な情念の繊細さと敏感さを徐々に減らすことになるだろう。[26]

このようにヒュームは、科学と自由学芸において正しい判断力と敏感な感覚に達するためには、多くのものの見方を理解し、多くの事情を比較対照し、人間本性に関する知識を獲得することが必要だと述べている。つまり、自由学芸における幅広い教養が「趣味の繊細さ」を養うとしているのである。だとすれば、ヒュームの『道徳・政治・文学論集』の全体、さらには著作全体が「趣味の繊細さ」を陶冶するためのリベラル・アーツだったとも言える。

こうした観点から『道徳・政治・文学論集』を読み直すならば、多様なものの見方や多くの事情を幅広く検討し、読者の視野を広くし、自由学芸の教養を深め、健全な判断と繊細な感覚を養い、中庸や冷静な態度を養うことにヒュームの主眼があったことがわかるだろう。

たとえば、エッセイ「歴史の研究について」では、歴史を学ぶことの利点を三つ挙げ、「想像力を楽しませること、理解力を改善すること、美徳を強めること」としている。[27] しかも、同エッセイは「女性読者」に向けて書かれていると明言している。[28] ヒュームは、特定の政治エリート層よりもかなり広い層を想定してエッセイを書き、その理解力や美徳

といった資質の陶冶を目指していたのである。

また、自由学芸や歴史とともに人文主義的要素をなす「レトリック」を主題としている文章にエッセイ「雄弁について」がある。その中で、ヒュームは自由学芸と関連して、レトリックの進歩を促している。ヒュームによれば、同時代のブリテンは多くの点で古代よりも優れているにもかかわらず「雄弁」（eloquence）という点では劣っている。ヒュームは、時代に適合したレトリックのあり方を考察する中で、以下の引用文に見るように、レトリックと政治との関係をも意識している。

すべての洗練された学識ある国民の中で、イングランドのみが人民の統治（popular government）を有している。つまり、雄弁が支配することができるであろうと想定される、かくも多数からなる集会を立法府に認めている。[29]

ヒュームによれば、名誉革命後のイングランドのみが「人民の統治」を達成しており、本来であればそのような体制こそがレトリックや雄弁の発揮にふさわしい。にもかかわらず、イングランドには雄弁家が乏しいし、同時代のイングランド人は議会の演説に関心を寄せようとはしない。[30]

ヒュームは、近代において雄弁を衰退させたとされる三つの理由に反論し、雄弁が近代において成立しうるはずだと述べる。まず、古代に比べて近代では法律が複雑になったために学習が困難になったとする理由が検討され、それが法廷での雄弁を難しくするとしても議会での雄弁を妨げる理由にはならないとする。次に、古代人が情念にあまりにも強く訴えたのに対し、現代人は良識が発達したからだとする理由に対して、ギリシャのデモステネスの演説がローマのキケロのものよりも「純正で質実」であり、それが模倣されれば近代の集会でも確実に成功するとし、その特徴は外形的な技巧ではなくて圧倒的に力強い論理的思考であるべきだとする。ローマではなくてギリシャのデモステネスのレト

リックが模範となるべきであり、かつそれを模範とすれば近代の良識と適合したレトリックを育成できるとする。そして最後に、古代の政治的危機が雄弁のきっかけになったとする理由に対し、ヒュームは政治的危機は近代にも存在すると反論している。[31]

ヒュームは、雄弁の成功例が少しでもあれば、多くの人々が勇気づけられ、雄弁が近代において発展するはずだと述べる。そして、模範があれば、人々はより正しい理解と洗練された嗜好に導かれるとする。さらに、以下のように述べる。

これら〔完璧な模範のこと。傍点は原文ではイタリック。〕が現れれば、すぐにすべての賛成票を集め、その自然で力強い魅力から、最も強い偏見さえ乗り越えて、人々の愛と称賛を得るだろう。すべての情念や情緒の諸原理はあらゆる人々の中にあり、気まぐれな機知と空想の混ぜ物の美しさとは区別される天才の作品によってそれらが適切に触れられると、それらは生起し、心を温め、満足をもたらす。そして、この観察がすべての自由学芸（liberal arts）に関して真実ならば、雄弁に関しては特にそうであるに違いない。[32]

ここには、自由学芸および雄弁において良い模範に接することが、人々の満足や人間性の向上につながることと、良き模範は必ず多くの人の支持を集められることが述べられている。自由学芸および雄弁は、ヒュームにとって、近代においてもより工夫され追求されるべき事柄だった。

さらに、同エッセイにおいて、ヒュームは、近代において大事にされる「議論と推論における冷静な態度」（composed air of argument and reasoning）[33]を離れることなく、古代の雄弁の欠点は是正できるとし、かつ、近代において即興が重視され演説のための準備や規則がなおざりにされる傾向を批判して同エッセイを締めくくっている。つまり、古代の過度のおおげささではなく、礼節と両立する形で、単なる即興ではない一定の規則や方法論を工夫したレトリックが、

近代において工夫され活性化されるべきだというのである。

ヒュームは、雄弁のみならず、文体についても考察しており、エッセイ「著述の簡素と洗練について」の中で、洗練の過剰を戒め、簡素さを大切にし、洗練と簡素の中庸を説いている。ヒュームによれば、アテナイよりもヘレニズム期の雄弁が堕落し、[34] アウグストゥスの時代よりもクラウディウスやネロの時代は趣味と才能が劣った。フランスやイングランドにおいても、趣味の堕落の症状が現れているという。[35] 挙げられている歴史的な事例を考えれば、単に文章が過度の洗練のために堕落したというだけでなく、政治的な自由の衰退とレトリックの衰退が相関していると考え、その観点から警告を発していると考えられる。

ヒュームは、エッセイ「言論・出版の自由について」の中では、イングランドにおいては広範な言論の自由が享受されていると指摘し、権力への適切な警戒心にもとづく言論の自由の行使によって政治的自由が維持されると説いた。[36]

本節で見たように、ヒュームは、言論の自由の行使の前提となる人間の資質を、自由学芸の教養により陶冶すべきだと考えていた。自由学芸および雄弁の陶冶は、政治との関連を意識したものであり、近代において追求されるべきものだとしていたのである。

次節では、政治社会の構成員が、本節で確認した自由学芸の教養や陶冶を身につけていることを前提としている「シヴィリティ」という初期近代特有の文明の作法について検討し、シヴィリティに基づく政治社会をヒュームが構想していたこと、そしてそれが破壊されてしまう危険性について強い危機感を抱いていたことを考察したい。

第三節　勤労・知識・シヴィリティ——陶冶に基づく政治社会

本節では、前節で検討した人間の資質の陶冶が、シヴィリティや勤労と関連して、ヒュームの政治思想において重要

な位置を占めていたことを明らかにしたい。「シヴィリティ」（civility）とは、civilization が「文明」を指す語彙として一般的になる一九世紀よりも前の時代において、礼儀や作法と関連して用いられていた語彙であり、もともとは宮廷の人文主義によって育まれ、ルネサンスから一八世紀まで、デモクラシー以前の時代には文明社会の作法として再生産されたものだった。[37] ヒュームにおいては、このシヴィリティが近代社会における重要な要素だと考えられ、かつ極めて繊細であり破壊されやすいものと考えられていた。

『道徳・政治・文学論集』の中のエッセイ「技芸における洗練について」の中の以下の一文は、ヒュームの文明社会論を示したものとしてしばしば引用される箇所である。

> これらの洗練された技芸が進歩すればするほど、人々はますます社交的になる。学問（science）に充実しており、豊富な会話を持っている時には、人々が孤立したままで満足することはできないし、あるいは無知で野蛮な諸民族に特有なあの疎遠な態度で仲間の市民たちと生活するということはできない。〔中略〕したがって人々は、知識と自由学芸（knowledge and the liberal arts）から受けとる改善に加えて、互いに会話し、相互の喜びや楽しみに貢献するという習慣そのものから、人間性の高まりを感じずにはいられない。こうして、勤労と知識と人間性（*industry, knowledge,* and *humanity*）は解き離しがたい鎖で結ばれており、それらが一層洗練された、そして一般に一層奢侈的な時代と呼ばれている時代に特有なものであることは、理性のみならず経験からも分かるのである。[38]

ここには、洗練された技芸・奢侈の発展した商業社会においては、勤労と知識と人間性が連鎖的に発展していく様子が描かれている。ヒュームが文明社会の自律的な発展を分析したということは、すでに坂本達哉をはじめとする先行研究が分析してきたが、[39] 前節との関連で注目したいのは「知識」が「自由学芸」とセットで使用されており、ヒュームが

言う知識とは、前節で検討した幅広い自由学芸の教養を指していたと考えられることである。近代の文明社会の分析に見えるヒュームのこの文章は、実は自由学芸という人文主義的教養を指す語彙と関連していたのである。

さらに、この「人間性」が「シヴィリティ」と関連のあるものとヒュームが考えていたことをうかがわせる、上記の引用箇所とよく似た、しかし、いささか異なる表現の文章が存在する。同じ『道徳・政治・文学論集』の中のエッセイ「国民性について」の中の以下の一文である。

一般的に、すべての国民性の中で、勇気は最も不安定なものであることに私たちは気づくだろう。なぜならば、それは間隔を置いてのみ発揮されるものであるし、あらゆる国民において少数の人によってのみ発揮されるものだからである。ところが、勤労、知識、シヴィリティ（industry, knowledge, civility）は継続的にかつ誰にでも役立つものであり、幾世代にもわたり、国民全体の習慣となるだろう。(40)

ここでヒュームは、勇気などの古代的な徳ではなく、勤労・知識・シヴィリティという近代的な徳は万人の役に立ち、国民性につながっていくとしている。注目したいのは、さきほどの引用文の「勤労、知識、人間性」という表現とよく似た、「勤労、知識、シヴィリティ」という表現である。ヒュームにおいては、「人間性」や「シヴィリティ」は、「勤労」と「知識」（自由学芸）と密接な関わりを有するものと考えられ、かつ軍事的な徳である勇気が間欠的であるのに対し、継続的で万人に関わるものとして考えられていた。シヴィリティと人間性は同じ意味ではないとしても、勤労と知識とそれぞれに密接な関わりがあるとされていたことは間違いない。

シヴィリティとは、ヒュームにとっては、コミュニケーションを円滑にするものである。ヒュームは、エッセイ「技芸と学問の生成・発展について」の中で、シヴィリティについて、以下のように述べている。

会話の技術（the arts of conversation）の中で、お互いに敬意を払うこと、すなわちシヴィリティほど人を喜ばせるものはない。シヴィリティは、私たちの傾向を仲間たちに譲るように導き、人間の心にとっては至って自然なものであるところの無遠慮や傲慢を抑制し覆い隠すように導く。良い教育を受けた良い性質の人は、前もって熟慮することもなく、利害も関係なく、誰にでもこのシヴィリティを実践する。[41]

ヒュームにおいては、他者とコミュニケーションをかわす会話は、自らの判断を是正し、人間性を高めるために不可欠だった。[42] たとえば、エッセイ「エッセイを書くことについて」では、ヒュームは自らを学問の世界から会話の世界への大使だとみなしている。[43] 同エッセイでは、会話がなければ人間の思考の主題も十分に得られないとも述べている。[44] 会話は「会話の技術」つまりシヴィリティなしには円滑には成り立たないものだとヒュームは考えていたように、先の引用箇所からは思われる。

ヒュームは、シヴィリティは宮廷と女性という二つの要素と関連して発達すると考えていた。そのことは、エッセイ「技芸と学問の生成・発展について」に見られる。同エッセイでヒュームは、シヴィリティは共和政体では発達せず、宮廷が存在し上位の人間の視線を気にする君主政体で洗練されると指摘している。と同時に、ヴェネチアでは共和政体だったにもかかわらずシヴィリティが存在したとも指摘し、その原因を他のイタリア人との交流であるとしている。[45] シヴィリティは宮廷によって洗練されるとしても、共和政の国にも受容可能で伝播可能なものだというのである。[46]

他方、女性との関連については、以下のように述べている。

もし礼節（politeness）において優れていることが近代に認められるとすれば、宮廷と君主政体の自然な産物であるところの、女性に対する心やさしい振舞い（*gallantry*）という近代の考え方に、この洗練の原因を帰すことがたぶ

んできるだろう。この考案が近代のものであることを否定する人はいない。[47]

同エッセイでは「女性に対する心やさしい振舞いは、自然や寛大さに適合するだけでなく、それに劣らず知恵や思慮（*wisdom* and *prudence*）に適合する」とも述べている。ヒュームによれば、女性との交際が確立していなかった古代においては会話は洗練されておらず、近代に比べて下品だったというのである。[48]

さらに、ヒュームはエッセイ「国民性について」の中でも、「愛情（love）―それは適切に管理されるときはすべての礼儀正しさと洗練の源泉（the source of all politeness and refinement）である」と述べている。[49] また、エッセイ「一夫多妻と離婚について」においては、多妻制が夫婦間の「愛と友情」を破壊してしまうと述べており、つまり結婚は一夫一婦の愛と友情にこそ価値があるとしている。[50] このようにヒュームは、古代と近代の優劣の判断において、近代社会における女性に対する交際の仕方や愛情の涵養に極めて大きな意義を見出していたのである。

しかしヒュームは、このようなシヴィリティはたやすく破壊されうるものだとも認識していた。イングランド史の以下の箇所は、レトリックの悪用が破壊的な作用を及ぼすのを危惧していたことをよく表している。

チャールズ一世の殺害後にイングランドを覆った混乱は、それまでそれによって国が統治されることに慣れてきた世俗および教会のあらゆる権威が解体されることからだけでなく、支配的な党派を煽っていた改善や革新の精神からも促進された。あらゆる人が共和国の範型を形作った。それがどんなに新しく、空想的であっても、人は仲間にそれを熱心に進め、あるいは他人に強制的に押し付けさえしたのだった。あらゆる人が、なんらの伝統的な権威から得られたわけでもなく、その人固有のもので、想像上の霊感に基づき、なんらの人間の理性の原則にもとづかず、手段を持たない宗教の体系に自らを適応させていた。それに加えて、くだらない御託と低級なレトリック（cant and low

rhetoric）によって、その宗教は自らを他に推薦した。[51]

これは、イングランド内乱期についてのヒュームの描写であるが、宗教的な狂信がまき散らす「低級なレトリック」に対するヒュームの警戒感を示している。ヒュームは、前節で検討したエッセイ「雄弁について」に見られるように、必ずしもレトリック全般を否定していたわけではない。他者との共存を目指すシヴィリティと結びついた望ましいレトリックと、独善や排他性と結びついた狂信がまき散らす低級なレトリックとを区分していたのである。適切に用いられたレトリックを肯定的に評価していたが、低級なレトリックには強い拒否感を抱いていた。[52]

ヒュームは、『イングランド史』の五巻・六巻でイングランド内乱の時代を取り扱っているが、その中で繰り返し狂信（fanaticism, fanatic）を批判している。それは、狂信が相互の共存を不可能とし、暴力による衝突を招くからだった。ヒュームの諸著作における宗教批判の目的が狂信を退けることにあったのは、多くの先行研究が指摘しているとおりで間違いない。だが、ヒュームの宗教批判が政治学の一環として十分位置づけられてきたとは必ずしも言い難い。その中で、犬塚元は、ポスト・コンフェッショナリズムという課題を持った啓蒙思想家としてヒュームをとらえ、ヒュームの宗教批判をその観点から政治学の中に位置づけている。[53] 犬塚の解釈は極めて優れたものであり、筆者も異論はない。しかし、ヒュームにおける宗教批判には啓蒙主義の側面があるのと同時に、シヴィリティという人文主義的要素が関連付けられてもいたことは注意を要する。[54] たとえば『イングランド史』の中で、ジェームズ一世の時代について以下のように述べている。

その国の生活様式（manners）は、君主の統治に適合していた。そして、それは普及していた。また、現在、イングランドを他のすべての国々から区別している、奇妙な混合が含まれていたわけでもなかった。勤労（industry）と放

蕩、倹約と乱費、シヴィリティと粗野（rusticity）、狂信と懐疑（fanaticism and scepticism）といったかくも激しい極端は、まだ知られていなかった。[55]

このようにヒュームは、内乱後の時代においては、シヴィリティと粗野が、狂信と懐疑が、勤労と放蕩が混在していると認識していた。ヒュームはイングランドの問題を、シヴィリティと、それを破壊しかねない狂信との混在にあると見ていたのである。

それでは、いかにして狂信を防ぎ、シヴィリティを育み守るのか。本節冒頭で見たように、ヒュームは、勤労・知識・シヴィリティおよび人間性は密接に関わるものと考えられていた。かつ、それらは各自の努力で自覚的に陶冶すべき問題と考えられていた。自覚的な陶冶についてのヒュームの見解を示しているのが『道徳・政治・文学論集』所収のエッセイ「ストア派」および「懐疑派」である。

ヒュームの『道徳・政治・文学論集』の中には、「エピクロス派」「ストア派」「プラトン派」「懐疑派」という四つの古代哲学の学派の名称を冠したエッセイがある。この四つのエッセイは、それらの諸学派の実際とはかなり異なる主張に力点を置いており、それら諸学派の優劣を検討しているわけでもない。輪島達郎は、この四つのエッセイが最後まで削除されなかったことから、ヒュームにおいて重要な意味を持っており、ヒューム政治論の前提となる幸福論をなしているとし、ヒューム自身の立場を懐疑的ストア主義だとしている。[56] また、ハリスはこの四つのエッセイに関し、自然で穏和なストア派を最善としつつ、人間の傾向性がさまざまであることを前提にし、学問と自由学芸によって気質の改善を図るというエッセイ「懐疑派」の中の一節をヒューム自身の立場だとしている。[57] 筆者も「ストア派」と「懐疑派」はヒューム自身の哲学および幸福論を見る上で重要なエッセイであると考える。

エッセイ「ストア派」には、ヒュームが「勤労」を人間の精神の陶冶の意味でも用いている箇所がある。同エッセイ

は、人間を避けて隠遁することは幸せにつながらないとし、一般的なストア派のアパテイアの境地とは異なる考えを説いている。ヒュームは同エッセイの中で、以下のように述べている。

また、その同じ勤労（industry）によって、私たちの精神を陶冶し（the cultivating of our mind）、情念を穏やかにし（the moderating of our passions）、理性を啓蒙し（the enlightening of our reason）、気持ちよく仕事をすることができないだろうか。そうして、私たちは、日々に自らの進歩を感じるのと同時に、新しい魅力に絶え間なく輝く私たちの内面の特性と表情を見ることができるのではないか。(58)

ここには、勤労による人間の精神の陶冶についての評価が見られる。industry は「勤労」や「産業活動」などと訳されることが多いが、ヒュームの用例においては、精神の陶冶の努力をも指していた。勤労による陶冶により人間の情念を穏和化することが、理性の啓蒙と同様に重視されていたのである。

さらに、この「ストア派」というエッセイでは、社会的美徳や社会的愛情、社会的情念といったことが述べられており、社会の中で他者とともに生きることの中に喜びがあり、美徳の報酬は美徳そのものだと説かれている。古代ストア派のアパテイアとは全く異なり、社会の中で生き、陶冶と結びついた「勤労」に自覚的に励むところに人間の幸福があるとヒュームは見ていた。

ヒュームは、エッセイ「懐疑派」においても注目すべき議論を行っている。ヒュームは、人間各自に支配的な心の傾向があり、多様性があることと、かつ、自分の性向に従いつつも人生の進路を選び取り、適切な選択能力を働かせる人間のほうが幸せであるとしている。そのうえで、美や喜びなどの感情は心や情念の中にあり、対象物の側にはないと論じ、さらに以下のように述べている。

幸福であるためには、情念は粗野なものや激しいものではなく、温和な社交的なものでなければならない。〔中略〕幸福であるためには、情念は陰鬱でも憂鬱でもなく、快活で陽気でなければならない。希望と喜びへの傾向性が本当の豊かさである。不安や悲しみへの傾向性が本当の貧しさである。[59]

ここでは、人間の穏やかさや社交と幸福とが密接に関連付けられて論じられている。それでは、どのようにして穏やかな人間性が獲得されるのか。同エッセイは以下のように主張している。

学問（science）や自由学芸（liberal arts）に真摯な注意を向けることは、気性を穏やかにし人間らしくする（softens and humanizes the temper）し、また真実の美徳や名誉がその中に含まれている素晴らしい感情を大切に育てる。趣味や学問を持つ人間が〔他に〕どのような弱点を持っていようとも、少なくとも正直でないことは、めったにない、本当にめったにないことである。[60]

ここには、自由学芸によって人間性を穏やかにすること、つまり陶冶が明確に論じられている。他にも同エッセイの中でヒュームは、「習慣は精神を改善し、それに善い性質と傾向を注入するもう一つの力強い手段である」ということや、「そしてここに技芸と哲学の主要な勝利がある。それは気づかぬうちに気質を洗練する。そして、絶えざる精神の熱中と反復する習慣によって、達成のためには努力すべきだという性質を私たちに指摘する」と述べている。[61] つまり、ヒュームは、習慣や学芸による人間性の可塑性を論じており、従来考えられていたよりもはるかに人間性の陶冶に重きを置いていた。

ところで、木村俊道は、文明社会における作法の必要をヒュームが説いたことを指摘しつつ、時代の転換に際しそうした議論はもはや対応できなくなっていった、あるいは後景に退くものだったとしている。[62] しかし、本節で見たように、

シヴィリティは、少なくともヒュームにとっては決して時代遅れのものではなく、古代に対する近代の優位の証拠となるものとして考えられていたのである。

幅広い自由学芸の教養を身につけ、陶冶によって情念を穏和化し、シヴィリティという会話の技術を身につけ、社交的で勤労に努める。そのような人間像がヒュームの政治社会においては前提とされていた。しかも、そのようなシヴィリティは、宮廷社会での交際や女性との交際によって培われた繊細なものであり、宗教的な狂信や熱狂や低級なレトリックによって容易に破壊されてしまう危険性を伴うものだった。ヒュームにおいては、政治や宗教の熱狂の過剰は、政治社会におけるシヴィリティを破壊してしまうものであり、人々には常に自由学芸の教養による陶冶によって穏健で冷静な態度を涵養することが要請されていた。陶冶とシヴィリティは、ヒュームが近代の政治社会を構想するに際し、野蛮や破壊を避けるために不可欠の前提と考えられていた。ヒューム政治思想においては、勤労と自由学芸の知識教養とシヴィリティと人間性の陶冶は、密接不可分だったのである。

おわりに

本稿では、ヒュームにおいて人間性の陶冶が重要な課題だったことを確認した。従来の先行研究では、この点は必ずしも十分に汲み取られていなかったように思われる。ヒュームにおいては、自由学芸の教養を持ち陶冶に努めることは、決して政治と無関係ではなく、むしろ政治社会を成り立たせる前提だった。幅広い視野と穏和な態度を身に着け、一定のシヴィリティを有する人々が、適切なレトリックを駆使し、会話を通じて相互に啓発しあう社会を、ヒュームは構想し希求していた。その実現のためには、狂信を避け、低級なレトリックを使わず、洗練された穏和な精神を身に着け、シヴィリティを維持し、自覚的なたえざる人間性の陶冶に努めることをヒューム政治思想は要請していた。これが本稿

の結論である。

本稿では十分に論じきれなかったが、このヒュームの人間性の陶冶という主張と、異なる二つの党派の共存と相互牽制とが分かちがたく結びついていることを明らかにし、ヒュームにおける政治社会の完成としての「自由」を全体として描くことが次の課題である。

（1）“cultivation”を「陶冶」と翻訳し、一九世紀のJ・S・ミルの政治思想を自由と陶冶の相互依存の観点から論じたものとしては、関口正司の研究がある。関口正司『自由と陶冶　J・S・ミルとマス・デモクラシー』（みすず書房、一九八九年）。本稿は、それに大きな示唆を受けつつ、一八世紀のヒュームにおける「陶冶」を分析することを目指している。

（2）人文主義とは多義的な意味を持つ言葉であるが、木村俊道は「古典古代の教養と学問の実践を重視し、他方で論理学や自然哲学を中心とするスコラ学とは対照的な、文法・修辞・詩・歴史・道徳哲学を中心とする人文学（studia humanitatis）の習得によって人間の完成を目指した知的運動」の呼称として人文主義を用いている。また、木村は、一九世紀以後の civilization とは異なり、礼儀や作法と関連した civility（シヴィリティ）が初期近代の人文主義において特徴的な語彙だったことを指摘している。本稿では、人文主義について、木村の見解を踏襲している。木村俊道『文明と教養の〈政治〉　近代デモクラシー以前の政治思想』（講談社、二〇一三年）、六九、一〇八頁。

（3）L・スティーブン、中野好之訳『十八世紀イギリス思想史　下』（筑摩書房、一九八五年）、六一頁。また、ラスキは、ヒュームを「ある体系の創始者ではない」「彼自ら政治哲学を樹立しえなかった」としている。ラスキ、堀豊彦ほか訳『イギリス政治思想Ⅱ』（岩波書店、一九五八年）、八六 - 八七頁。

（4）E. C. Mossner, *The Life of David Hume*, Thomas Nelson & Sons, 1954, p.301.

（5）ダンカン・フォーブズ、田中秀夫監訳『ヒュームの哲学的政治学』（昭和堂、二〇一一年）、一八九頁および三七八 - 三七九頁。

（6）Russell Hardin, *David Hume: Moral & Political Theorist*, Oxford University Press, 2007, pp. 24-26. Andrew Sabl, *Hume's Politics*, Princeton University Press, 2012, pp. 227-247.

（7）舟橋喜恵『ヒュームと人間の科学』（勁草書房、一九八五年）、二五六頁。

（8）坂本達哉『ヒュームの文明社会―勤労・知識・自由』（創文社、一九九五年）、三七三頁。

（9）犬塚元『デイヴィッド・ヒュームの政治学』（東京大学出版会、二〇〇四年）、一 - 一七、二八六頁。

(10) Ryu Susato, *Hume's Sceptical Enlightenment*, Edinburgh University Press, 2015.
(11) 萬屋博喜・森直人・犬塚元「ヒューム研究の現在」、『イギリス哲学研究　第三八号』（日本イギリス哲学会、二〇一五年）、八三 - 九四頁。
(12) 犬塚元『デイヴィッド・ヒュームの政治学』（東京大学出版会、二〇〇四年）、三頁。
(13) E. C. Mossner, *The Life of David Hume*, Thomas Nelson & Sons, 1954, pp. 73-75.
(14) T. xi. ／邦訳一五頁、T. xv-xvii. ／邦訳二一 - 二三頁。
(15) 舟橋喜恵『ヒュームと人間の科学』（勁草書房、一九八五年）、一八九頁。
(16) 木村俊道『文明と教養の〈政治〉　近代デモクラシー以前の政治思想』（講談社、二〇一三年）、一八、三二頁。
(17) James A. Harris, *Hume*, Cambridge University Press, 2015, viii.
(18) Ibid., 14-24.
(19) Marc Hanvelt, *The Politics of Eloquence*, University of Toronto Press, 2012.
(20) Ibid., 130.
(21) Ibid., 107.
(22) 半澤孝麿『ヨーロッパ思想史のなかの自由』（創文社、二〇〇六年）、二九一頁。
(23) E. 4. ／邦訳二頁。
(24) この“the sciences”を「科学」と翻訳するか「学問」と翻訳するかは難しい問題であるが、『道徳・政治・文学論集』の第三エッセイ「政治は科学になりうる」（That Politics may be reduced to a Science）が通常「科学」の訳語を用いていることを考えて、科学と訳している。
(25) E. 68. ／邦訳三 - 四頁。
(26) E. 6. ／邦訳三頁。
(27) E. 565. ／邦訳四五四頁。
(28) E. 563. ／邦訳四五三頁。
(29) E. 99. ／邦訳八八頁。
(30) “popular government”をどう翻訳するかは難しい問題であるが、エッセイ「言論・出版の自由について」等を見ると、ヒュームにおいては混合政体における共和政的要素優位の体制を想定していたと思われる。「民主的な統治」と翻訳しても良いとも考えるが、デモクラシーとの混同を避けるため、本稿ではそのまま直訳で「人民の統治」と訳した。

(31) E. 102-106. / 邦訳九〇・九二頁。
(32) E. 107. / 邦訳九二・九三頁。
(33) E. 109. / 邦訳九四頁。
(34) 原文では、アッティカの雄弁よりもアジアが堕落したとある。アッティカはアテナイのことを指しており、アジアというのはアテナイのデモステネスらののちの時代のヘレニズム期を指すと考えられる。
(35) E. 196. / 邦訳一六九頁。
(36) 鎌田厚志「言論の自由とその条件」、『政治研究』（九州大学）第六〇号、二〇一三年、二〇七・二三八頁。
(37) 木村俊道『文明と教養の〈政治〉　近代デモクラシー以前の政治思想』（講談社、二〇一三年）、一二九頁・一六三頁。
(38) E. 271. / 邦訳二二三頁。
(39) 坂本達哉『ヒュームの文明社会――勤労・知識・自由』（創文社、一九九五年）、三七三頁。
(40) E. 212. / 邦訳一七八頁。
(41) E. 126. / 邦訳一〇九頁。
(42) 林誓雄は、ヒュームの『人間本性論』を、徳倫理学の一種として解釈し、徳（性格）を善く育むためには、社交と会話の時間の積み重ねが重視されていたと解釈している。林誓雄『襤褸を纏った徳　ヒューム　社交と時間の倫理学』（京都大学学術出版会、二〇一五年）、一八四頁。
(43) E. 535. / 邦訳四三一頁。
(44) E. 533-534. / 邦訳四三〇頁。
(45) E. 127. / 邦訳一一〇頁。
(46) ヒューム自身はシヴィリティという言葉で述べているものの、宮廷からの伝播という点は、ノルベルト・エリアスがコーテシーからシヴィリティへという図式で説明した宮廷から市民社会への礼節の伝播と軌を一にしている。ノルベルト・エリアス著、赤井慧爾ほか訳『文明化の過程　上　ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』（法政大学出版局、一九七七年）。『文明化の過程　下　社会の変遷／文明化の理論のための見取図』（法政大学出版局、一九七八年）。
(47) E. 131. / 邦訳一一二頁。
(48) E. 133. / 邦訳一一四頁。
(49) E. 215. / 邦訳一八〇頁。
(50) E. 185. / 邦訳一六〇頁。

（51）H6. 3.

（52）ハンヴェルトは、ヒュームのレトリックを「低次のレトリック」（low rhetoric）と「高次のレトリック」（high rhetoric）に区分している。Marc Hanvelt, *The Politics of Eloquence*, University of Toronto Press, 2012, pp. 8-11, 53-55. ただし、前者がヒュームのテキストに根拠を持つ用例であるのに対し、後者は潜在的にそのような論理がヒュームに内在していたとしても、ヒューム自身に用例がないことは注意を要すると考える。

（53）犬塚元「歴史叙述の政治思想――啓蒙の文明化のナラティヴ」、『岩波講座　政治哲学二　啓蒙・改革・革命』（岩波書店、二〇一四年）、二七 - 四九頁。および、犬塚元「ポスト・コンフェッショナリストとしてのヒューム――『イングランド史』における政治・宗教・歴史」、『思想』第一〇五二号、二〇一一年、六二 - 八三頁。

（54）宗教批判は啓蒙主義の特徴でもあるが、初期近代における宗教の狂信や熱狂に対する批判は人文主義者が行ってきたことでもあった。渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』（白水社、一九九七年）。

（55）H5. 132.

（56）輪島達郎「ヒューム政治思想の前提としての幸福論――『道徳・政治小論集』幸福論四連作の研究」、『社會科學討究』三九巻二号、一九九三年一二月、六四八頁。

（57）James A. Harris, *Hume*, Cambridge University Press, 2015, p. 193.

（58）E. 149. / 邦訳一三四頁。

（59）E. 167. / 邦訳一四六頁。

（60）E. 170. / 邦訳一四八頁。

（61）E. 170-171. / 邦訳一四九頁。

（62）木村俊道『文明の作法』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）、四八頁。木村俊道『文明と教養の〈政治〉　近代デモクラシー以前の政治思想』（講談社、二〇一三年）、一六二頁 - 一六三頁。